



古きを調べて 新しきを知る

郷土史家 筒井 隆義さん

69歳。野中町在住。旧長崎時事新聞社の記者を経て、昭和43年に佐世保市職員に転身。広報係に籍をおき市広報紙の発行業務などに携わる。市内の史跡をエピソードとともに紹介する広報紙で人気の「歴史散歩」を昭和55年から執筆。市役所退職後も執筆を続け、平成16年12月までの内容をまとめた「改訂増補版 させぼ歴史散歩」(平成17年3月発行)が、ことし、第25回佐世保文学賞を受賞。

歴史に対する好奇心の積み重ねで振り返ると、広報紙に「歴史散歩」の記事を書き続けて26年がたつていました。歴史というものが重要な意味を持つてわたしの取材範囲に入ってきたのは、吉井町の福井洞窟取材した新聞記者時代にさかのぼります。わたしは、人と人とのコミュニケーションを図る上で重要な言葉に関する仕事をしたいと思いついて、その連載もその一つで、これを通じて市民の皆さんとわたしが結び付いていることを実感できます。

歴史散歩の素材は、自分の足で探しますが、見るものすべてが歴史を語っており、素材となるものは尽きることがありません。取材は地元の人に話を聞くほか、図書館で関係書を調べるなど、二重、三重の裏付け調査が必要で、調べ上げるのに14、15年かかったものや、関東まで足を伸ばしたものもあります。調べてい

るうちに新しい疑問が出てくるなど、歴史を調べる上での難しさもありますが、思わぬところで思わぬ発見をしたり、これは面白いというものを見つかりました。ときめき、は忘れることができません。また、これまで取材した人やそのときの状況は一つ一つ鮮明に覚えていて、それらの出会いがわたしの財産です。時代とともに失われてしまう史跡も数多くありますが、写真と文章で後世に残すことができたいと思います。

佐世保は、明治時代、新しいものを自分でみつけようという意欲にあふれた人が各地から寄り集まってきた所で、新興都市ならではの開かれた地域性の良さがあります。わたしは、「佐世保大好き人間」で、佐世保への愛着は人一倍あります。歴史散歩を通して、市民の皆さんが佐世保に対して誇りを持ち、佐世保への愛着を強めてもらえる一つのきっかけになればうれしく思います。



今月号の歴史散歩「吉居野次平旧宅」について取材する筒井さん

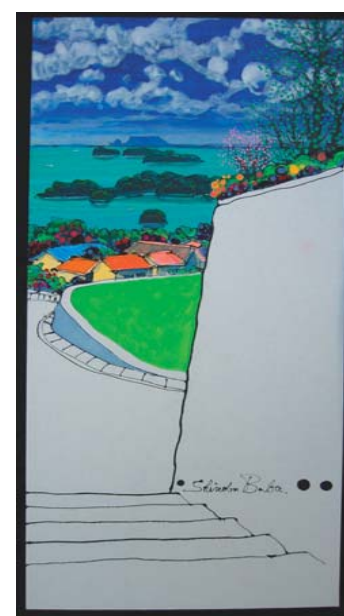
見慣れた風景の中に 新しい感動を覚える

画家 馬場 忍さん

68歳。小島町在住。中学校・高校の美術科教師時代から教職の合間に精力的に創作活動を行う。代表的な作風は、ガラス絵を取り入れたアクリル画。15年程前から佐世保の風景画を描き始め、作品をホームページや画集、国内外で開催の個展などで発表し、幅広く佐世保の風景を紹介している。ことし7月には九十九島の風景画集「風薫る西海路」を発刊予定。(<http://park11.wakwak.com/artbaba/>)



アトリエにある色付け前の風景画



▶『白い雲』(7月発刊予定の「風薫る西海路」から)

以前のわたしは、海外に行くこと、普段目にしない新鮮な風景に感動して、時間を忘れるほど夢中でそれをスケッチしていましたが、見慣れた佐世保の風景には、絵を描きたいという気持ちがわきまきませんでした。

佐世保の風景画を描き始めるきっかけとなったのは、市外から佐世保を訪れた友人に「佐世保の風景は素晴らしい。どこでも絵になる」と言われたことです。それから、「いつたいどういふ所に感動を持つのだろうか」と、佐世保のまちをあらためて見るようになり、普段は通らない道を通ったり、行ったことのない場所へ入ってみたりしました。すると、佐世保のまちには高低があつて背景には海や山があり、大都会の平面的な構図とは違い、非常に面白い構図があることに気がきました。

当時、バイクに乗っていたわたしは、小道を上がったり、小さい路地に入ったりと、車では入れない場所

に行き、今までは違う九十九島や佐世保市街の風景に出会うたびに新しい感動を覚えました。そして、佐世保にいる人がそのような景色に感動しないのはもったいないと感じたのです。

家族は常日ごろ一緒にいるとその良さや愛しさに気付かないことが多いもの。同じように違った視点や角度、少し離れて見てみるなど、何かのきっかけで佐世保のまちの良さが増すのではないのでしょうか。

佐世保の風景を多くの人に知ってもらいたいと、ホームページに風景画を掲載しています。ニューヨーク在住の教え子から「先生のホームページを見ました」と手紙をもらい、インターネットを通して世界中の人に見てもらえることを実感しました。自分で納得のいく絵にはまだ達することができていませんが、人に感動を与えられる絵をこれからも描き続けていきたいです。